

◎シリーズ 長岡京歴史散歩

(128)

長三小校区の遺跡
〜今里遺跡の腕輪形石製品〜

今里遺跡といえば、規模がとても大きく、存続期間も長きにわたる集落跡で、神足遺跡や雲宮遺跡とともに長岡京市を代表する遺跡の一つに数えられています。今里遺跡では、これまでに数多くの発掘調査が行われ、各時代ごとにみるべき成果が得られています。今回は、出土例のきわめて乏しい古墳時代前期の遺物について紹介したいと思います。

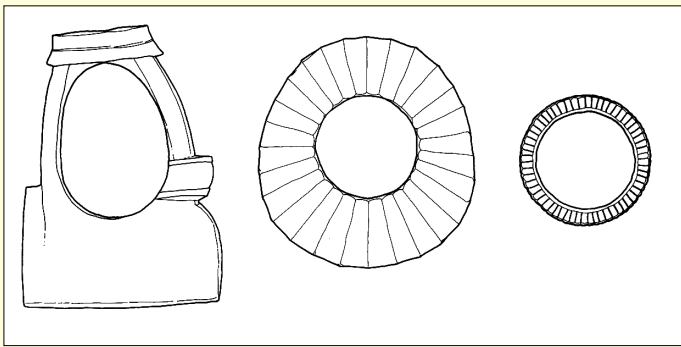
その遺物とは、淡い緑灰色をした緑色凝灰岩ぎょうかいがんで作られた車輪石しやりんせきと呼ばれる腕輪形の石製品で、その破片が乙訓寺の南側にあたる2カ所の調査地

点でそれぞれ1点ずつ出土しました。

車輪石は、卵形ないしは円形をした平らな環状品で、いくつもの筋が放射状にデザインされています。その外見がスポークのある車輪に似ていることから、車輪石と名付けられたそうです。車輪石の他にも、鋏形石かたいしや石釧いしすくなど形の異なる腕輪形の石製品が知られていて、それらはいずれも種子島から琉球列島にかけての南海に生息するゴホウラやイモガイ、オオツタノハなど聞き慣れない名前の貝を加工した貝輪を祖形としています。ただし、腕輪形の石製品とはいっても、実際に腕に装着した実用品ではなく、

宝器あるいは呪術的な性格をもったものと考えられ、古墳時代前期の古墳から出土する場合があります。

▲ 今里遺跡で出土した車輪石（破片）



▲ 腕輪形の石製品

車輪石が出土した乙訓寺の南側では、埴輪はにわの破片も各所で出土していることを考えあわせると、未知なる古墳の存在した可能性が濃厚といえるでしょう。そして、車輪石は、その未知なる古墳に副葬されていたもので、古墳が破壊された際に破片となって拡散したものと考えるべきでしょう。